

地域課題解決型学習による人材育成プログラム

広島文化学園大学看護学部

加藤 重子, 森田 克也, 山内 京子, 佐々木秀美, 日川 幸江
上西 孝明, 杉山 祥子, 林 君江, 進藤 美樹, 久保 泰子
前信 由美, 讃井 真理, 上林 聡子



【大崎上島町編】
平成28年3月25日

■ 地域課題解決型学習による人材育成のコンセプト

学生と教職員が一体となり、高齢者を中心とした住民の健康実態調査・意識調査を行う。この計画・実施により、地域住民が抱える課題探究を図るだけでなく、学生が活動を通して日々の教育活動への動機づけになる成功体験やコミュニケーションの大切さに気付く機会創出を図る。

未来を担う学生の「地域の課題解決」への意識向上,その先の専門性を活かした地域貢献へのアクションの創出を導く。

■ 趣旨・目的

本学では、「豊かな人間性に基づいて社会に貢献できる力の習得」を教育理念の一つとし、三学部それぞれの専門知識・技能を地域の課題解決に生かすべく、地域住民参加型の教育研究活動を行っている。

看護学部では呉市沖合の情島での演習活動などの地域住民の健康・福祉に寄与できる活動を行ってきた。また、学芸学部では子育て支援や音楽活動を通して、社会情報学部では、健康と福祉及び街づくり参画の活動を中心として地域貢献を図っている。今回、大崎上島町を対象地域として、地域課題解決型人材育成プログラムを実施することとした。大崎上島町は、大崎町、東野町及び木江町が平成15年4月1日に合併し一島一町となった。大崎上島町は、平成22年（2010年）国勢調査によると総人口8,044人で65歳以上の人口が全人口の42.8%を占めるほどに高齢化が進んでいる。

かとう しげこ

〒737-0004 広島県呉市阿賀南2-10-3 広島文化学園大学看護学部

高齢者は、「低栄養→筋力低下→嚥下能力の低下→記憶力低下」等の「負のスパイラル」が起きることにより、QOLの低下・健康寿命の低下を招くと考える。この「負のスパイラル」が起きることにより、医療保険費の増大、生産年齢の国民の負担の増加を招き、地域の疲弊・衰退といった地域課題の根幹をなすものとする。高齢者の身体的機能低下を防ぐことができれば、骨折などによる寝たきりの防止や高齢者の自立した生活が期待でき、日常生活におけるQOLが高まるという効果が期待される。それは、介護保険料と医療費の削減、延いては生産年齢層の心身社会的負担の軽減につながると思う。

少子高齢化が深刻で喫緊の問題を抱える大崎上島町をモデルとして、学生と教職員が一体となって、データの採取や聞き取り調査を行う。それを集計・解析することで、地域住民の健康状況の把握と課題の抽出が可能となる。

また、活動成果を地域住民に還元することで健康意識の啓発に寄与することができ、学生との交流をきっかけとした地域コミュニティの活性化が期待できる。こうした流れを作ることで、大学・自治体・地域住民が相互に連携して継続的に一体となって課題解決に取り組む意識を共有でき、協力体制の構築が可能となる。三学部の専門チームがそれぞれの観点から解決を図るための体制を整備し行政や地域住民と一体となった「地域住民総合健康増進支援事業」構築の出発点と位置づくと思う（図1）。

地域課題解決型学習による人材育成プログラムの実施により、地域住民の健康状況の把握・課題解決といった地域貢献だけでなく、専門知識を必要とする機器を活用した健康調査や聞き取りによる課題を探究するという取り組み自体が学生にとって「実感する学び」であり「地域の未来」を考える力を伸ばす実践の場となる。

本稿は、平成27年度に実施した看護学部の「地域課題解決型学習による人材育成プログラム」の実践を報告することを目的とする。

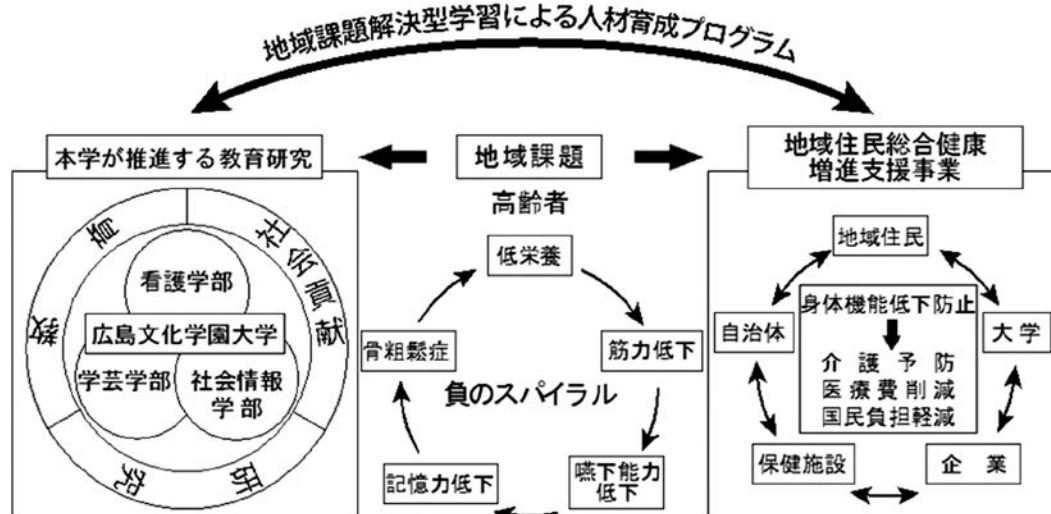


図1 地域課題解決型学習による人材育成プログラム

■ 各機関との連携・協力

本事業実施にあたり、本学と広島商船高等専門学校は、平成26年度より3年間の包括連携・協力を締結した。本学と大崎上島町は、平成26年度1年間の連携・協力を締結し1回目の調査にあたった。平成26年度実績に基づき、平成27年度も継続し、本学と大崎上島町の連携・協力を締結し、実施体制を整えた。

■ 倫理的配慮

本調査は、広島文化学園大学の倫理委員会に申請し承認を得て行った。被験者である地域住民に対して、本調査の目的・趣旨・結果の公表について文書と口頭で説明し同意を得た。

■ 地域課題解決型学習による人材育成プログラム

保健師コース必修科目・看護師コース選択科目である「公衆衛生看護方法論Ⅰ」に位置付け「地域の健康とまちづくり」の6コマのうち2コマを「地域の健康課題の発見」のためのフィールドワークとした。

1) 健康課題抽出のためのデータ収集

- (1) 調査対象
要介護状態にない高齢者（65歳以上）
- (2) 調査内容
体内水分量，下肢筋力，骨密度，認知機能，嚥下機能，生活習慣等
- (3) 方法
「公衆衛生看護方法論Ⅰ」履修学生は1人1回フィールドワークに参画した。学生と教員がグループになり測定から結果の説明までを行った。

2) 学生の学習体験の流れ

学生の学習体験は，事前学習，フィールドワーク，事後学習からなる。

- (1) 事前学習
 - ① 「地域の健康課題の発見」のためのフィールドワークについて説明，自主的に行う事前学習を行った。
 - ② 地域看護学教員により，各測定機器の専門家を招き，（骨密度測定，嚥下機能測定，下肢筋力測定，認知機能測定，体内水分測定）原理と使用方法について説明を受けたのち，学生・教員合同で知識・手順の確認およびシミュレーションを実施し技術を習得した。
- (2) フィールドワーク
大崎上島町の東野保健センター，大崎上島総合開発センター，木江会館の3か所にて実施した。
- (3) 事後学習
学習内容を自由にファイリングしポートフォリオにまとめた。

■ 結 果

学生と教職員が一体となり高齢者を中心とした住民の健康実態調査として，身長・体重・握力，・下肢筋力・歩幅・嚥下機能・体内水分量・骨密度・認知機能を測定し，運動習慣・食生活・趣味・夢・お他者自慢カルテを作成し聞き取りを実施した。

1) 実施日時，場所，受診者数

- | | | |
|-----------------------------|------------|-----|
| (1) 平成28年2月6日（土）13時～15時 | 東野保健福祉センター | 22名 |
| (2) 平成28年2月13日（土）13時～14時30分 | 大崎開発センター | 18名 |
| (3) 平成28年2月27日（土）13時～15時 | 木江会館 | 28名 |

2) 事業運営・運営者内訳

学生と教員が一体となり本事業「大崎上島町健康調査・お達者自慢」を推進した。各会場での準備，調査，おもてなし，片付け等に広島商船高等専門学校教職員，大崎上島町役場衛生課課長・保健師が協力し円滑に運営した。

- (1) 東野保健福祉センター
広島文化学園大学看護学部学生40名，教員13名
広島商船高等専門学校学生4名，教職員5名
大崎上島町役場 保健衛生課 2名
大崎海星高校1年生1名

(2) 大崎開発センター

広島文化学園大学看護学部学生36名，教員10名

広島商船高等専門学校学生5名，教職員4名

大崎上島町役場 保健衛生課 2名

海星高校1年生1名

(3) 木江会館

広島文化学園大学看護学部学生33名，教員11名

広島商船高等専門学校学生6名，教職員5名

大崎上島町役場 保健衛生課 2名

3) 健康調査の会場の風景

各会場の健康調査・お達者自慢の聞き取りの様子を以下に写真で紹介する。各会場では，同様な水準で調査が進められるよう，測定に当たる学生・教員を固定した。また，多様な検査の準備に高齢者が迷うことがないようにマンツーマンで学生を配置し順路を案内と検査補助を行った。

順路は，本調査の目的・趣旨説明⇒血圧測定・身長・握力測定⇒体内水分量測定⇒骨密度測定⇒嚥下力測定⇒下肢筋力測定⇒認知力測定⇒生活習慣聞き取り⇒結果説明と保健指導とした。

聞き取り時は，お茶でゆっくりともてなし学生と高齢者の相互交流を図った。すべての調査完了後は，一日の振り返りを行った。(図2～図6)

(1) 東野保健センターでの様子



図2 血圧測定から順次検査へ



図3 下肢筋力を測定



図4 教員（保健師）による健康指導



図5 おもてなし・質問コーナー



図6 振り返り

佐々木副学長の進行により、本学の学生、広島商船高等専門学校の学生、大崎海生高校の生徒、科目担当の教員、広島商船高等専門学校の教員、大崎上島町役場保健衛生課の課長、保健師、全員で本日の評価・感想を述べあった。

(感想の一部)

- ・講義では、学べない貴重な経験でした。これからの実習にいかしたい。
- ・看護の学生さんは、動きがとてもよく自分たちも勉強になりました。
- ・何もわからなくて戸惑いしましたが、大学生の方が説明をしてくれてすごいなと思いました。
- ・これだけ多くの検査を全員で協力して機械を設置して、測定の様子も一日見させてもらって本当によくやってくれたと思います。
- ・見学させていただきましたが、これだけ住民の方が満足されていて、本当に良かったと思います。保健師になるためにこれを生かして勉強してほしい。

(2) 大崎開発センターでの様子



図7 下肢筋力測定の説明



図8 会場の様子



図9 体内水分測定のための器械装着

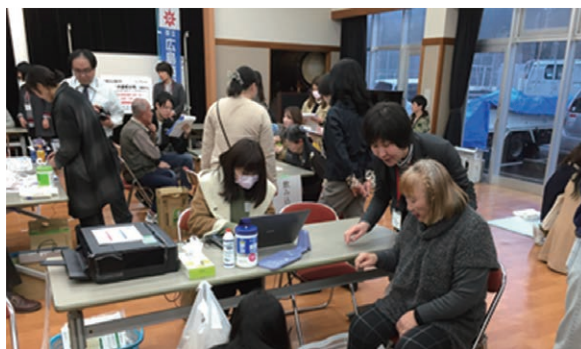


図10 骨密度測定の説明と準備



図11 検査結果の説明をする学生



図12 検査やお話を振り返り

高齢者と学生が、マンツーマンで対話しながら検査会場を巡り、各測定場所では、テキパキと準備・検査の説明を行った（図7～10）。すべての検査が終了した後に、保健師コースの指導教員の見守りのもとで、学生が説明と保健指導を実施（図11）。高齢者は真剣に耳を傾けていた。

結果説明と、保健指導の後、お茶やコーヒーを飲みながらほっと一息つき、学生とともにカルテを振り返り感想を述べあっていた（図12）。

（3）木江会館での様子



図13 持ち場ごと内容・手順の確認



図14 学生間のミーティング



図15 調査協力について説明



図16 マッチングと自己紹介



図17 血圧測定は保健師コース学生ら



図18 骨密度、体内水分、歩幅測定



図19 嚥下機能測定



図20 お達者自慢をうかがう様子

本会場では、当日、交通のアクシデントがあり、大崎上島まで到着できない教員・学生が多数いたために、学生間で対応を検討し、業務内容を調整のうえ、首尾よく健康調査にあたった（図13～図20）。

（4）本学の学生と広島商船高等専門学校学生の協働



図21 商船学生へ測定方法の説明



図22 商船学生と協働して測定



図23 商船学生と打ち合わせ（後方）



図24 会場全体の様子

前回まで広島商船高等専門学校の学生・教職員は、身長体重測定、おもてなしコーナーを中心に実施していた。最終日は、下肢筋力測定、認知機能測定、聞き取りに参加してもらい本学学生と商船学生間で、協働して実施することができた（図21～図24）。

（5）指導技術、対話能力向上

学生は、健康調査を通して、高齢者の反応を見ながら説明方法を変え、アイコンタクトをとり、低い声で、ゆっくり専門用語をさけてわかりやすく説明し、モデルを行って見せて高齢者が検査方法を理解できるよう工夫していた（図25～図27）。

認知機能検査では、視界に入って集中力が途切れないように離れて見守りをしていた（図28）。



図25 わかりやすくモデルを示す



図26 下肢筋力の測定方法を説明



図27 認知力テストの説明



図28 離れて認知力テストを見守る

生活習慣を聞き取る場面では、高齢者も学生に聞き返されると分かりやすく言い方を変えたりジェスチャーをして伝えていた（図29、30）。

役場職員や教員が見守る中、学生と高齢者は交流を深めていた。教員は、高齢者からの質問に丁寧に答え、学生にモデルを示していた（図32）。



図29 生活習慣を聞き取る様子



図30 高齢者も学生に分かりやすく説明



図31 あちこちでお達者自慢の花が咲く



図32 質問に応じモデルを示す教員

4) 調査結果の概要と学生への動機づけ

健康調査では、骨密度も体内水分量も下回る人は見られず、ほとんどの高齢者が正常範囲内であった。

高齢者は、健康に対する関心が高く、散歩、趣味、食事に気を付けて健康維持の取組をしている方が多かった。また、「気を付けていること」の質問に、薬の服用を上げ自ら健康管理に取り組んでいた。

保健指導では、生活習慣を指摘するより良い点を再確認して指導することが多かった。「前回、骨密度が低く食事に気を付けることで高くなった」と喜ばれており、「これからも食事・運動に気を付けたい」と健康増進への意思を強くしていた。

学生は、どの回もイキイキかつ丁寧に聴取やおもてなしができ、会場はお茶会サロンのように賑わい、高齢者は、学生にお達者自慢をしていた。「死ぬまで来ます。」と意欲を見せる高齢者もいた。

全ての会場を通して、長時間お待たせすることなく転倒もなく安全に実施できた。

人材育成プログラムの計画・実施により、学生は、日々の教育活動への動機づけになる成功体験や、コミュニケーションの大切さに気付く機会となった。

地域住民と学生の関わりで学生が捉えた高齢者の反応と学生の感想は次のようであった。(一部)

(1) 学生が捉えた高齢者の反応

- ・大崎上島町の高齢者はとても健康状況が良かった。少し足元がふらふらしていても、自分の力でできる限り生活していた。高齢者さんは自分の生活のリズムを整え、食事に気を付け、適度な運動などを行い、どの人も自分の好きなように楽しく生きていることが健康の一番の秘訣のように感じた。
- ・島の高齢者さんは畑仕事や漁師など仕事を行い、食事は自炊で散歩やマラソンなど運動をしている人が多いという印象である。
- ・多くの人が60歳を超えても農作業を行い、運動量や日光浴をされ、骨密度測定結果も全体的に良かった。毎日を健康に過ごすために、何かしら外に出て体を動かしていた。健康に気を付けている人が多く、お酒やたばこなどはしない方が多かった。
- ・大崎上島町の高齢者さんは、健康的でした。少し血圧が高い方もおられましたが、後は気になるところはなかった。健康調査をしていると、毎日歩いているといわれた方が多く、それが健康につながっているのかと思った。

以上のように多くの学生は、高齢者が健康について気を付けていること、それを実践していること、できる限り楽しい生活を心がけていることを理解していた。

(2) 学生の感想

- ・楽しかった。はじめは、説明が下手であったがだんだん高齢者さんに伝わるよう工夫して自信を持ってすることができた。
 - ・高齢者さんは、夢やこれからの希望を持っていることが分かった。ここに部活の合宿に来たことがあった。その時にお世話になった方が覚えていて下さりご縁を感じた。
 - ・80歳代なのに、20代くらいの骨密度の方や筋力が強い方が居て日頃の生活に注意していることがわかった。
 - ・今回、高齢者と話したこと、健康調査したことをこれから始まる基礎実習に活かしたい。また、ぜひ大崎上島町に会いに来たい。
 - ・コミュニケーションの取り方を心配していたが、話しやすい雰囲気を高齢者さんが作ってくださった。
 - ・高齢者さんが自分自身の健康をととてもよく考えていることに驚いた。
 - ・高齢者は、元気でよく話しをされ笑顔が絶えなかった、やさしく素敵な高齢者さんが多かった。
- と多くの学生が高齢者を肯定的に捉えていた。

■ 総 括

本事業は、大崎上島町を活動の拠点にして、関係自治体および関係機関と包括的協定締結を基盤に実施したものである。広島文化学園大学地域連携センター長がリーダーシップをとり、学生の主体的な学びを促進するアクティブ・ラーニングとして公衆衛生看護方法論Ⅰに位置付けてプログラムを展開した。

本学地域連携センターと大崎上島町保健衛生課および広島商船高等専門学校の連携・協力を密にして大崎上島全戸に広報して効果的に参加者を募集し当日の運営をすることができた。

本プログラムの計画・実施により学生は、地域住民が抱える課題探究し、活動を通して日々の教育活動への動機づけになる成功体験やコミュニケーションの大切さに気付く機会創出を図ることができた。さらに、活動成果を地域住民に還元することで健康意識の啓発に寄与し、学生との交流をきっかけとした地域コミュニティの活性化が期待できると強く感じることもできた。

こうした流れを作ることで、大学・自治体・地域住民が相互に連携して継続的に一体となって課題解決に取り組む意識を共有でき、協力体制の構築が可能となるであろう。本事業は、「地域住民総合健康増進支援事業」構築の出発点として重要な意義を持つこととなる。

本事業も2年目となり、さらに3者協働の関係性が構築できた。

今回は、平成27年度に実施した看護学部の「課題解決型学習による人材育成プログラム」実践を中間報告として展開をまとめた。

今後は、データ分析をして健康課題抽出し、3学部が連携協力のもと地域が主体となる地域住民総合健康増進支援事業プログラムへと発展することができればと考える。

以上を平成27年度の本事業報告とする。